実力向上講座（毛筆）

【第八回】「漢字（五体）の基本と書き方」
―草書②　特徴と鑑賞―

常葉大学教授
本誌編集委員　平形　精逸

◇はじめに

先月号では、草書の歴史と書道史上の代表的な古典を取り上げて鑑賞しました。今月は草書の特徴をまとめた後、難しい草書の形を確かめます。また『書譜』を読んで草書の今日的意義を考えます。

■草書の特徴

草書を楷書と比較すると、次の特徴があげられます。

①点画は略化され、曲線的である。

②点画間の連続が多く、実画と虚画（空画）の区別もつきにくい。

③速く書けるが、知らないと読めない字が多い（次ページ参照）。覚えるしかない。

④曲折・連続・右旋回運動などをすすめる中で、抑揚や遅速の変化が生じるため、毛筆の弾力を生かした線表現が多彩である。

■草書の字形

草書の多くは隷書の速書きの中から生まれたものです。漢時代の簡牘からどのようにしてできたか「書・道」で見てみましょう。

また、中には篆書から発生したと思われる草書もあります。次の「天・方」はその例です。

秦時代の竹簡（睡虎地秦簡）には篆書のたけが低くなり、直線的に速筆しながら今日の草書と同じ書き方になる原型が見られます。

■難しい草書

■似ている部首と字形

（『書の古典と理論』より抜粋）

■『書譜』を読む

孫過庭の書いた草書の名品『書譜』は、中国を代表する書論としても有名です。現代にも通用する部分を二つ取り上げますので、書の学習の参考にして下さい。

眞以點畫爲形質、使轉爲情性。草以點畫爲情性、使轉爲形質。草乖使轉、不能成字。眞虧點畫猶可記文。廻互雖殊、大體相涉。

〔読み方〕真は点画を以て形質と為し、使転を情性と為す。草は点画を以て情性と為し、使転を形質と為す。草は使転に乖けば字を成す能わず。真は点画を虧くとも猶お文を記す可し。廻互殊なりと雖も、大体相い渉る。

〔意味〕楷書は一点一画を形の本質とし、運筆の動きを感情表現とする。草書は一点一画によって感情の趣を表すが、運筆の動きは形の本質である。草書はリズム感から離れると字の態をなさないが、楷書は一点一画を欠いても、一応は文字としての識別が可能である。（このように楷書と草書とでは）相関関係はあい反するけれども、しかし大筋においては相互に関係しあっている。（西林昭一訳）

	楷書	草書
形質	点画	使転
情性	使転	点画

〔解説〕楷書、行書、草書どの書体も大切であることを述べた後に続く一文です。書には形を整える働き（形質）と、趣を与える働き（情性）がありますが、楷書と草書とでは上図のように要素が反対の関係になっていることを説明しています。〝使転〟とは曲線的な要素をなすべきリズムのことですから、楷書は直線的に書きますがリズムで趣を出し、草書は曲線を本体としますが直線的な運筆で趣を出すという意味になります。臨書や創作にあたっては常にこのことを心掛けたいものです。

また、楷書は一字でも異体字のようにいくつかの書き方がありますが、草書は「似ている形」で取り上げたように、ちょっとした曲線の具合で別の字になってしまいます。したがって、それぞれの形を覚える必要があります。

神怡務閑、一合也。感惠徇知、二合也。時和氣潤、三合也。紙墨相發、四合也。偶然欲書、五合也。

〔読み方〕神怡び務閑なるは、一の合なり。感惠く徇知なるは二の合なり。時和ぎ気潤うは、三の合なり。紙墨相い発するは、四の合なり。偶然書せんと欲するは、五の合なり。

〔意味〕こころがやわらいで仕事がひまな時は、合の第一である。感が恵くはたらき何事もすぐ理解できるときは合の第二である。気候が穏やかで大気に潤いのある時は合の第三である。紙と墨がよくなじむときは合の第四である。ふと書いてみようとする気持がおきたときは合の第五である。

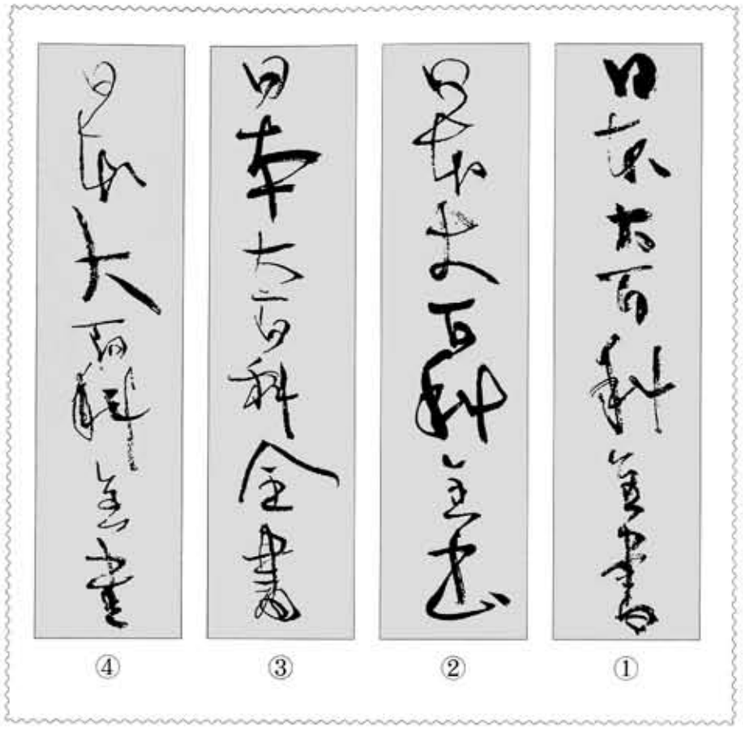
（西林昭一訳）

〔解説〕同じ人が書いても調子よくいくときといかないときがあり、うまくいく時の条件を上から五つずつあげている一文です。この後にうまくいかないときの条件を五つあげています。書は気分に左右されやすい芸術であるといわれていますが、心がゆったりとして頭の冴えている時に最も筆がのびて、思いのままに筆が動くと述べています。これらの条件を満たすことは現実には難しいことですが、理想として胸に刻んでおきましょう。

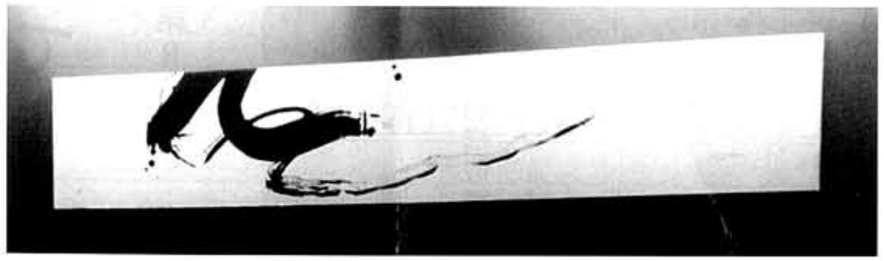
カット・橋本綾乃

■生活の中の草書

青山杉雨先生（文化勲章受章者。一九一一～一九九三）による傲書作品の三回目、今回は草書です。単独の草書は少なく、行草書を含めても四点だけです。それでもそれぞれの作例は躍動感に溢れ、鑑る者をあきさせません。


①　②　③　④

①元時代の墨跡書法
②明時代の祝允明書法による草書
③明時代の徐渭書法による行草書
④明時代の董其昌書法による行草書


田中逸齋氏　書「飛」（東京・羽田エクセルホテル東急ロビー）

草書は可読性が弱いために、日常の中で見かけることはほとんどありません。少ない中でも注目されるのは、上掲の田中逸齋氏による作品です。一見「飛」とは読めませんが、空港の壁面にみごとに調和した現代的なインテリアの書として注目を集めています。

左の石碑は、西郷隆盛（南洲）の自著『南洲遺訓』の中に見える有名な言葉が草書で刻されています。天を敬い自分を愛する心で人を愛するという意味です。「愛」は行書ですが、重厚な筆使いで空間をしっかりおさえています。「南洲書」も草書です。

西郷隆盛（　南洲　）書「敬天愛人」（山形・鶴岡市）
（東京書籍版　中学校１年用教科書『新しい書写』より）